

音楽科教育における現代音楽鑑賞の授業実践について
～橋本國彦「斑猫」を聴く～

西 田 直 嗣

群馬大学教育実践研究 別刷
第31号 37～45頁 2014

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

音楽科教育における現代音楽鑑賞の授業実践について

～橋本國彦「斑猫」を聴く～

西田直嗣

音楽教育講座

Lesson practice of contemporary music appreciation in Music Education
listen to was composed by Hashimoto Kunihiko the “Tiger Beetle”

Naotsugi NISHIDA

Department of Music Education

キーワード：音楽鑑賞、橋本國彦

Keywords: Music Appreciation, Kunihiko Hashimoto

(2013年10月31日受理)

1. はじめに

中学以降の学習指導要領では、音楽の表現領域として、「歌唱」「器楽」「創作」の三つ。それに鑑賞領域の「鑑賞」が加わる。現代音楽は、その内容に関わらず、当然の事ながら今現在、もしくは現在に近い時期に作曲された音楽であり、いわゆる現代音楽以外のクラシック音楽が私たちに示すものが、時代を超えた普遍的な人間の心情や、様相であったとしても、現代の作曲家と同じ時代に生まれた私たちが現代音楽を最も私たちに身近な存在として感じることは自然な事である。しかし、現状はそうではない。

現代音楽を鑑賞の教材として使用する場合、その多くは新しい視点の発見による奇抜性に重きを置いた作品であろう。奇抜か清新かというところは難しい判断ではある。しかし現代音楽の清新性の感受が現状の音楽教育で可能かというところ非常に難しいと言わざるを得ない。よって旋律、伝統的な和声を用いず、それ以外の要素により作られた奇抜性のない現代音楽作品が子どもたちの興味を引き出す事は難しく、鑑賞教材としては教育効果の低いものになってしまうだろう。

本稿では、定義づけの曖昧な現代音楽を、「現代に作曲された芸術作品」と定義し、教育現場での「鑑賞」が、奇抜性に秀でた作品に偏る事無く、真に音楽に親しみ、心に響く授業になることを願い考察するものである。本稿では幼児期から高等教育までの音楽教育の実情を踏まえて、現場で敬遠されがちな現代音楽の鑑賞の有効性を見いだしてゆきたい。

2. こどもと音楽

例えば、いわゆる現代小説と現代音楽に対する現代人の「興味」における差異は明らかで、現代を象徴している現代小説は好んで読むが、現代音楽はよく分からないから聞かないという現象は、国語教育と音楽教育の性質の差が象徴しているように、日常、言語として扱う素材を用いる「国語」に対し、非日常的な素材によって構築されている「音楽」の仕組みのわかりにくさが現代音楽に対する抵抗感を生み出す最も大きな要因と考えられる。そもそも乳幼児から発せられる言語は「パパ」「ブーブー」など身近な物質を呼ぶことから始まり、それらを繋いでゆく「文章」へと発展して

ゆくが、彼らが聴く音楽は、作曲家により作曲された芸術作品そのもので、それが形づくられるまでの過程は全く認識されないといい。そしてピアノの鍵盤のならばや多種多様な楽器のつくりにしる、様々な音階を含む音楽理論にしる、それらは「音楽」を演奏するために作られたものであり、「音楽」の出発点は楽器や理論ではなく音楽そのものである。つまり、国語教育における創作（作文）は、それが優れた作品であるか否かを問わなければ、ある程度実現しやすい学習と考えられるが、音楽の「創作」においては、それが意図をもって音が配列されて初めて創作と呼ぶことが出来るのであり、それがなければ、出来たものは「でたらめ」である可能性が非常に高くなる。

幼少期から小学校までの音楽教育において創作があり得るなら、希有な天才は除き、彼らが触れた音楽を自ら少し形を変えた音楽として新たに音を並べ直した瞬間である。それを生み出すためには、様々な質の高い作品に触れ、音の配列の妙を体感すること無しには実現しない。幼児期に会得することのできるその体感教育現場ではその多くが歌唱であり、それが音楽教育として妥当か否かは別にしても、それが有効である理由は、私たちが季節ごとに登場する花鳥風月や人とのふれ合いについて作曲された歌をいつでも思い出すことができ、それによって季節や事象を何倍にも味わい深いものとして感じている事が示している。それは、モノとの音楽を通じた出会いを意味し、その音楽との密着度の強い関係によってにインプットされた旋律やハーモニーが新しい形を作り「創作」の花を咲かせるのであろう。

3. 共感について

現代音楽を愛好する人たちの割合は全人口からすると希少であり、それをそれ以外の「子どもたち」に聴かせようとするのだから、並大抵の努力ではうまくいかない。しかし現代音楽の作曲家も人の子であり、同じ時代をもしくは少し古い時代を生きてきた人間である。現代音楽に共感する何かを見いだす事ができれば生徒が興味、関心をもち聴取に向かう姿勢を獲得できるのではないかと考える。

そもそも奇抜な発想をもって作曲された音楽作品であろうとなかろうと、それは生活の中で日頃目にした

り、使用したり、また心にとどめているものを題材としていることが殆どである。ある意味で作曲とは日常的なモノや事象を自身の内部のフィルターを通して非日常的な世界、音楽構造を創造することに他ならないのであるから、作品を作るきっかけとなった日常的なモノや事象については共有しやすい共通事項であると言っている。しかし、その日常的なものが見えやすい題材と全く見えない題材が存在するのは確かである。そこで、題材が見えやすく、共感を得る事が出来、かつ非日常的な世界がしっかりと描かれていることを現在の音楽教育の教育効果の高い鑑賞教材の性質として提示し、実践を行う事を計画した。

4. 現代日本歌曲の鑑賞

本稿ではその3つの性質を兼ね備えた音楽のジャンルとして現代歌曲を挙げる。もちろん音楽に魅力がある事は必須であるが、鑑賞現代歌曲教材として学習効果を高めるためには、前述した3つの性質が詩（テキスト）において備わっている事が不可欠であると考えられる。テキストはその性格によりいくつかに分類できる。この分類がきちりとなされていないと、即ち詩の詩である目的をしっかりと捉えることが出来ない、学習の目的を見失う事になりかねない。私は学習に効果的な指導を行うために、題材（その多くはタイトル）を抽象的題材、具象的題材、に、さらに具象的題材については題材自体がテーマとなっているものと、題材を文章展開の契機としているものに大別した。

第一に、題材が抽象的なもの。例えば「愛」「こころ」「別れ」「問いかけ」など。抽象的なものは、それについて考えることが誰にでもあるにも関わらず、「○○」とはこういうものだという定義付けが自己においてなされる事は殆どないと言っている。詩人が考える「○○」との抽象的共通事項を見いだしながら理解し、共感することが鑑賞にむけての過程として不可欠である。

そして、その詩に対し自分自身が感じた事が音楽作品への作曲へと繋がる場合は「創作」となるのだが、聴く場合は「鑑賞」ということになる。しかし、鑑賞の場合、その抽象的共通事項がもう一人の作曲家という他人によっても共感され、そして作り上げられた楽曲を自身の共通事項と照らし合わせながら聴き、二つ

の共感が合わさってさらに大きな感動へと誘われるのか、それとも相反する共感による作曲によって、新しい世界を目の当たりにするのか、もちろんそのどちらでもない事も生じるであろう。どちらにせよそこには自己と他との「共感」の責めぎあいが存在し、そして強い興味を生み出してくれるはずである。

それでは、その3種の題材に付曲され歌われている3編の詩について具体的な例を挙げてみたい。

具象的題材を用い、それを文章展開の契機としている詩に、星野富弘 作詩「ジャガイモの花」を挙げる。

「じゃがいもの花」

星野富弘

泥だらけになって

じゃがいもを 掘っていたとき

ふと見上げた空が 手でさわれそうなほど近かったことを憶えている

高いところにあこがれ

山の頂上に 立った時

なんにもない空が

果てしなく 遠かった事を

憶えている

星野氏は「ジャガイモの花」を、詩を象徴する題材として用い、「ジャガイモ掘り」という誰もが体験したであろう行為を、結果的に望みを叶えるための契機として描いている。空に近づく事、言い換えれば人生において高みに上る事への憧れの実現が、一生懸命、土に即ち空とは反対の下方へ向かう「ジャガイモ掘り」によって不意に訪れる。主人公の視点や心境が大胆に変化していく事に着目できる詩であり、読者の体験と作者の思想が自然に合致しやすい共感性に開けた作品である。すでに多くの作曲家が付曲しているが、そこに着目し、音楽として実現されているかが鑑賞教材としての価値を左右すると考える。

次に抽象的題材として「問いかけ」を挙げる。「問いかけ」は私自身が付曲したもので、私は岡山から受験のために1人で上京し、東京の空を眺めながら、自分

がどこへたどり着くのかわからない不安な日々を送っていた。その不安感は今でも忘れることはなく、一つ乗り越えても生きている以上次から次へと問いかけたくなる事象は待ち構えている。

「問いかけ — 序詩」

滝口雅子

空の庭園のひとつひとつの星の

ふきあげのかげに 黙って立ちつくす

人よ

地上のかなしみを どんなふうにして

過ぎてきましたか どんなふうにして

天の星までたどりつきましたか

「問いかけ」は誰もが共有している空を題材の中心に据えているが、この詩で共有しているのは空ではなく、その空を見ながら天上の人に問いかけている作者の様相である。今の自分にはあの星へ(天)へたどり着く未来は見えない。天の星にどうやってたどりついたかと問いかけている。また、「一つ一つの星のふきあげ」と書かれており、星一つが一人の人間のこの世を去った姿の象徴として描かれ、さらに今立ちつくしているであろう「自分」と同じように彼らが身を隠しながら立ちつくしていると詠むこの幻想的な世界をイメージすることは容易ではないし、このような様相は誰もが体験することでは無いと考えられるが、未来を悲観して気が遠くなるように感じる事は多くの人が経験することであろう。言い方を変えれば「不安感・絶望感」の共有であるが、人生の良き終わりを「星にたどり着く」ことに例え、今現在を乗り越えてゆきたいという作者の力強い意思も垣間みる事ができる。深く読み込む設定がしっかりとなされ、表現されている世界に共感することが出来れば、心に深く突き刺さる鑑賞が期待できる。

最後に具象的題材を用い、それ自体が詩の内容になっている詩に、橋本國彦が付曲している「斑猫」を挙げる。

「斑猫」

深尾須磨子

斑猫です

南の国の夏のさかりに

甘え ふぎけ こびる斑猫です

色の主題はとりあつめた焦点の黄色で
とり合わされるのが濃青と臙脂と
そして紫です

斑猫です

誘っては逃げ 誘っては逃げ
たくみに身をかまし 身をそらし
捕えようとする手の尺ばかりを
つねに先がけ
つねにあとじさり

斑猫です

花よりもきれいな
宝石よりも美しい
そのくせ捕え手に死を与える恐しい
しかしただ一匹の昆虫です
うまくつかまえて襟飾りにでもしてください

深尾は斑猫の特徴を自由奔放で男性を誘惑し、翻弄する女性になぞらえている。さらに「斑猫」と「女性」の間にもう一つ介在しているものが「猫」である。「斑猫」は、そのまま読めば「まだらねこ」なので、当然のことではあるが、「猫」の特徴から名付けられた「昆虫」である。その昆虫の特徴からイメージされる「女性」というイメージへの連鎖が、この作品の大きな魅力である。そして、「斑猫」という昆虫は、誰もが知っているとは言えないだろう。反対に「猫」は誰もが確固たるイメージを持つ事ができる。詩を見てみると3番まであり、いずれも「はんみょうでーす」で始まり、「斑猫」を昆虫と確信できるのは3番になって初めてである。共感でき、新しい物象に対する好奇心をかき立てさせられる鑑賞教材である。

これまで現代歌曲作品鑑賞において、学習効果の高い3種の詩について触れてきたが、次項ではその中でも「斑猫」を実際の授業実践として取り上げた事例について述べたいと思う。

「斑猫」の内容は前述したが、「詩」の内容からいつて適する学年は中学2、3年から高校くらいであろう。橋本國彦は山田耕筰らと並んで、大正から昭和にかけ

て活躍した作曲家であり、フランスに留学した事をきっかけに作曲において新しい試みを行ったが、歌曲では日本語と西欧の音楽の融合を試みた。今なお歌われている歌曲には「お菓子と娘」「富士山見たら」など、シャンソンや唱歌に近い作品と「儼」「舞」(ともに詩：深尾須磨子)など、現代的作曲手法を用いた芸術性の高い作品とがあるが「斑猫」は後者である。

私はA高校(仮名)の教諭B氏に、この「斑猫」による現代歌曲鑑賞を提案し、授業で取り上げていただいた。歌曲のみならず現代音楽鑑賞に適した教材とは？ 前述したとおり現代に作られた楽曲はすべて現代音楽だといっても、楽曲の成り立ちに全く現代的な要素が含まれていなければ鑑賞教材には敵さないであろう。もちろん現代的な要素は聴き方、感じ方によって聴取、感受が難しい上、譜面を見てその要素を読み取るのは容易なことではない。それらの要素は結果的に生徒に聴取、感受されねばならないので、ある程度はつきりとした認知が可能な要素を持つ現代作品でなければならぬ。楽曲を見る上で着目すべき要素をできるだけ音楽教育的な見地により次のように大別する。

① [音楽の3要素]

音楽の3要素といえば旋律、和音、リズムであるが、一般的なそれらを使用しようとしなくても結果的に旋律は「聴こえてくる音の連続性」として、和音は「音の重なり」として、リズムは音の配置の「ずれ」として認知され、現代音楽においてもその3要素は残存する。

② [演奏形態]

演奏場所、編成、楽器編成の特殊性など。例えばシュトックハウゼンの「ヘリコプター」は、弦楽四重奏という古典的な編成とをとりながら、各奏者が別々にヘリコプターに乗り、飛行するヘリコプターの中で、イヤホンを使って他奏者の音を聞きながら演奏する。音響としてはその騒音とアコースティック楽器音とが融合した音となる。リゲティの「100台のメトロノームのためのポエム・サンフォニック」は、テンポ設定がバラバラな100個のメトロノームを配置し、一斉に鳴らすという手法で、演奏形態として特殊なのは楽器のみであり、メトロノームを楽器として設定するというアイデアが見事に活かされている名曲と言える。

③ [形式・音楽語法]

楽典で学習する形式と言え、2部、3部、ロンド、ソナタ、フーガなどであるが、今や現代音楽が、そのどれかによって楽曲が書かれる事は非常に少ない。形式は楽曲の構造を形作る最も重要な要素である事は疑う余地のない事であり、楽曲を知る最も大きな手がかりと言ってよいであろう。そして形式自体に作曲者が清新な発想を盛り込もうとする姿は顕著である。音楽語法については、使用している音階など、なかなか認知しにくい要素と、ミニマル音楽に代表されるオスティナートの使用等、音楽語法自体が現代的な認知しやすい要素として現れる例も少なくない。

④ [演奏法]

演奏法は特殊奏法と呼ばれる、例えば弦楽器のsul ponticelloやcollegno、管楽器の荒息、打楽器の特殊奏法のようにこれまで従来行っていなかった新しい楽器の奏法により表現するものと、グリッサンドを多用することによる新しい音響の構築など、従来の奏法の多

様性を追求したものが挙げられる。

⑤ [表現内容]

特に歌詞が存在する歌曲の場合は言うまでもなく、テキストをもとに作曲された器楽作品も、そのテキストの内容自体が現代的要素となる。しかし、現代に書かれた詩や他のテキストであっても、そこから生まれた音楽が現代的要素を持っていない場合もあり、詩の現代性と曲の現代性は双方から必要条件にも十分条件にも成り得ない。それゆえテキストを伴った歌曲作品の場合、鑑賞教材としてはあくまでも曲自体が、これまで挙げた現代的要素を持っている事が必須であろう。

今回とりあげる「斑猫」についての現代的要素を挙げる。① [音楽の3要素] については和声においてそれまで日本では見られなかった近代和声が使われており、要所では調性のない和声も登場する。

《譜例1》

The musical score for '斑猫' (Macchiato) is presented in two systems. The first system shows the vocal line and the beginning of the piano accompaniment. The vocal line starts with the lyrics 'あまえ ふざけ こびる はんみょうで す' and includes a fermata over the final note. The piano accompaniment begins with a sul ponticello effect, marked 'Una Corda' and 'Tre Corde'. The second system continues the piano accompaniment, featuring complex textures and dynamic markings such as 'cresc.', 'molto', 'sf', and 'rit.'. The score includes various musical notations such as slurs, accents, and fermatas.

《譜例2》

はん みょう
斑 猫

深尾須磨子 作詩
橋本國彦 作曲

Larghetto quasi andante M.M. ♩ = 56~60

The musical score for 'Hannya' is presented in two systems. The first system shows the piano accompaniment in 5/4 time, with a tempo marking of 'Larghetto quasi andante M.M. ♩ = 56~60'. The melody is in the right hand, starting with a piano (*p*) dynamic and moving towards a crescendo (*cresc.*). The second system includes the vocal line with lyrics 'はんみょうで す' (Hannya desu) and 'はんみょうで す' (Hannya desu). The piano accompaniment features a triplet of eighth notes (*sf*) and a triplet of sixteenth notes (*espress.*). Dynamics range from *mf* to *pp*. The score includes various performance instructions such as *rit.*, *a tempo*, and *con ped.*.

橋本國彦はシェーンベルクに師事した経歴も知られており、近代和声をさらに拡張していこうとしたことが見て取れる。高低の音域の広さや連符の多用は通常の歌曲にはない幅、複雑さを持っており（譜例1）、リズム、旋律線については変拍子を多用し、言葉のリズムに合わせ音の伸び縮みを自由に行っており、詩の現代的な性格を最大限引き出し、表現する事に成功している。

③ [形式・音楽語法] については詩の形式に沿っているといっている。前奏は1番の主題を殆ど前もって見せていると言えるが、くるくると転調を重ね、出だしに戻ってくるような形態を見せており、抜け道の見つからないメランコリックな全体の雰囲気象徴しているようでもある。（譜例2）歌が始まると「はんみょう」という名称を最後まで謎の生き物として「猫」や「女性」を連想させながら1番、2番と進み、最後に謎解きの答えのように「1匹の昆虫です」と明かし、

最後には「首飾りにでも」これまで語ってきた生き物をおつというまに剥製化してしまう大胆さも興味深い。主題の展開の手法は、近代の楽曲までの方法にとどまってはいるが、度々登場する主題は出てくるとに変奏曲を思わせるダイナミックな音型による変化をともなわせ、大きなスケール感が「はんみょう」に対する我々の肥大した妄想を暗示しているかのごとく波のように押し寄せてくる。（譜例1）

④ [演奏法]・⑤ [表現内容] について、要素としてこの二つを括らざるを得ないのは、この楽曲が詩と表現と奏法が見事に一体化するように創られているためである。この歌曲の大きな特徴の一つにレチタティーボの多用が挙げられるが、殆ど早口言葉の域に達しているこの設定が、昆虫の背中の固さ、冷たさ及び細かい動き、ぎこちない動きをする細く長い足などを想起させる。また、「はんみょうで一す」という間延びした表現とこの部分の差が、一つの昆虫の存在の奥深さ、

《譜例3》

The musical score for 'Hannya' (譜例3) is in 5/4 time and features a tempo marking of 'Un poco più mosso ma non troppo'. The melody is in the right hand, starting with a mezzo-forte (*mf*) dynamic. The piano accompaniment in the left hand features a steady eighth-note pattern. The lyrics are 'はんみょうで す さそってはにけ きそってはにけ' (Hannya desu sasottereha ni ke kisosottereha ni ke). The score includes performance instructions such as *p*, *mp*, and *con ped.*.

幅広い可能性を感じさせ、ここでもスケールの大きな音楽として感受される。(譜例3) また、同音の連呼で形作られているこのレチタティーボ部分のピアノはさりげなく主題を嵌めており、楽曲の統一感についての配慮が丁寧になされている。

「斑猫」は以上のような特徴を持っており、この楽曲が十分な現代性を持ち合わせた優れた作品である事がわかる。

5. 授業展開

このような教材を用いて鑑賞を行う場合、重要なのは授業展開である。鑑賞の授業展開は通常2通りに分けられる。一つは、曲を聴いてから解説、説明を行い、聴いた時のイメージに頭の中で自らが解説を添えて行く場合。二つ目は、まず曲について出来る限りの解説、説明を行ったあとに曲を聴く場合である。どちらを選ぶべきかは、曲の性質と鑑賞の目的により異なる。これは音楽との出会いの設計である。例えばショパン「木枯らしのエチュード」をタイトルも知らせず、解説も行わなければ、全く先入観のない頭で聴く事ができるので、音楽から各自の自由なイメージを引き出す事ができるだろう。自己のイメージがタイトルの実際とかげ離れていたり、合致したりすること自体に楽しみを見いだす事もできる。そして今しがた聴いた音楽を思い起こしながら、解説によって形作られるイメージと照合することになる。この場合再度聴く事ができれば教育効果は高まる。一方、解説、説明を先に聞いた時は、音楽を聴くまでの間にイメージが膨らみ、聴く回数は1回でも確固たる映像を頭に描きながら強い印象を獲得する事が可能となる。

「斑猫」の鑑賞の実践においては、よりその教材を生かすために、3番に初めて「昆虫」という文字が出てくる(斑猫が昆虫であることがばれる)ことをふまえ、次のような展開を設定した。

- 1) 詩の朗読(1番、2番のみ)
- 2) 聴取(1番、2番のみ)
- 3) 詩の内容の絵画表現
- 4) 聴取(1~3番)
- 5) 歌から受けた印象を発表し合う
- 6) 解説、説明

- 7) 2回目の聴取
- 8) 斑猫の写真を見せる
- 9) 現代音楽鑑賞についての感想を記述し提出させる

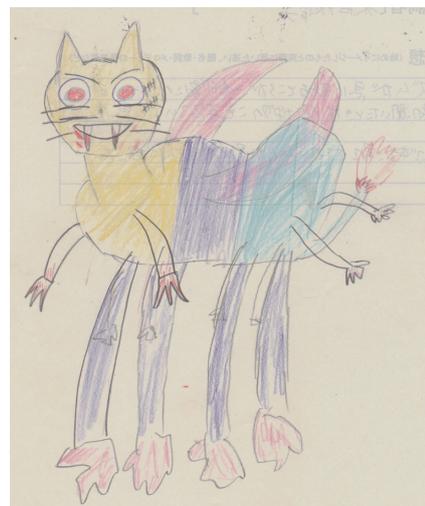
特に重要なのは、詩の内容から、及び楽曲の音楽性から読みとれる「斑猫」に対しておのおのが独自のイメージを構築する事。音楽鑑賞の一連の展開により音楽自体の魅力を十分に体感することである。8)の斑猫の写真を見せる場面設定もポイントである。「斑猫」が昆虫と分かっても、いったいどんな昆虫なのか、まだまだ想像を膨らませるのに多分の余地がある。

《斑猫》



それでは、3) 詩の内容の絵画表現 について生徒が描いた絵画をいくつか挙げる。Aさんの絵は詩の内容を、自己の常識に当てはめることなく、あるがままに描いた逸作である。

《Aさん》



Bさんのマダラ猫が南国の島にいるという絵は、最も多くの生徒が描いた描写で、1番の「南の島への～」

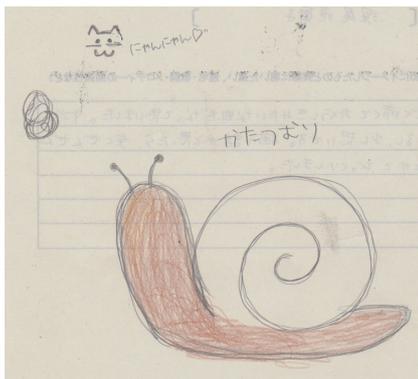
をそのまま表現しているものである。

《Bさん》



最後にCさんのカタツムリであるが、これはのんびりした最初の曲調を「カタツムリ」で表現したと考えられ、他の生徒には無い複雑、且つ独創的な感受の仕方が見てとれる。

《Cさん》



9) 現代音楽鑑賞についての感想をワークシートに記述し提出させることについては、以下のような結果(数字は人数)になっており、「猫」、「虫」、「女性」というこの詩、楽曲のテーマがしっかりと生徒の興味をひきつけ、実のある現代音楽鑑賞が行われたことが裏付けられている。特に聴くごとに音楽への理解や感受が深まって行く様子が見て取れ、先に挙げたこの楽曲の特徴が殆ど書かれていた事は大変な収穫であった。お葬式の曲みただったという感想についてはきつと、「はんみょうでーす」が「なんみょうほうれんげーきょう」に聞こえたのであろう。

ワークシート回収枚数-38枚()は人数

1) 斑猫について

猫の事だと思った。(24)
虫と知ってびっくり(17)
斑猫が気持ち悪い(6)
きれいな虫(1)
化け物と思った(1)

2) 音楽について

リズム、テンポが激しく変わる(9)
女性をイメージしていることが興味深い(8)
メロディーが暗くて怖い(6)
早口言葉が面白い(4)
聴いていくうちに内容が分かってきた(4)
不思議な曲(3)
迫力ある部分があった(1)
お葬式のような歌(1)
カラフル(1)
日本文化的(1)
歌声がきれい(1)

この授業を行ったB教諭によれば、鑑賞の授業は好きではない生徒が積極的に絵の描写、感想の記述を行っていたこと。絵については「絵が苦手な人は文章のみで」という配慮にも関わらず全員が絵を描いたことなど、通常見られない生徒たちの音楽鑑賞における積極的な姿勢を引き出す事が実現されていた。そもそも音楽は聴きたい人が聴きたいものを聴くもので、ある意味それを押しつけがましく聴かせることに対して異論も出てくるのは、もっともなことであるようにも考えられるが、生徒が読みたくもない詩や本は読ませるべきではないと言っては学習など成り立つはずもない。確かに、この実践で多くの生徒が感じた「なんだろう」「他の人はどう思っただろう」という興味は、楽曲の特殊な神秘性が引き起こしたものであり、それが前面に出すぎることにより、本来の鑑賞の目的が歪んでしまうと危惧されても不思議は無い。しかし、「斑猫」という音楽の本質はその神秘性の表出にあり、人と昆虫との共有している何かの発見である。教師はどのような教材を扱う場合も、楽曲に対し常に俯瞰しながら、言い換えればあくまでも音楽芸術として体感しながらその特徴、要素を見つめることが必要である。

6. 終わりに

鑑賞の意義は、名曲をただ「聴き」、「知る」、「感じる」とどまらず、私たち専門家はもちろん、芸術を愛好する人々が音楽を聴取する際に習慣として行っている、楽曲、情報、感受の要素の取り入れ方を噛み砕いて示し、生徒がより深い感受へ導き出す方策を体得することにある。現代音楽を鑑賞教材として扱う場合、その手はずがより慎重に行われ、本来楽曲が持っている魅力を教師側が引き出さなければならない。そのためには楽曲の性質、背景についての教材研究はもちろんのこと、いかなる名曲であれ、その音楽のすばらしさが生徒の興味、関心を引き起こすとは限らないという事を自然な事として念頭に置き、聴取するまでの過程、聴取のさせ方、について研究を行わなければなら

ない。音楽鑑賞教育を行う上では、それを人との出会いにも匹敵する「楽曲との出会い」と捉え、その瞬間をどう設定し、音楽と向き合わせる、あるいは親しませるのか熟考する事、言い換えれば作曲家の思索と感性と経験によって生まれた音楽芸術と、同じように思索と感性と経験をもって生きている人（生徒）との接点を丁寧に作り出していく事が求められる。

〈参考文献〉

- 1) 学研の図鑑「昆虫」
- 2) 林光 音楽教育 しろと論 (一橋書房)
- 3) 日本歌曲集2 (全音)
- 4) 新編 滝口雅子 詩集 (土曜美術出版社)
- 5) 星野富弘「花の詩画集 鈴の鳴る道」(偕成社)

(にしだ なおつぎ)

